

「倫理力」を磨く

上 廣 哲 治
うえ ひろ てつ じ

「倫理力を強化する方法を教えてください」。先日、ある若い会友さんに尋ねられました。時間がなかったので、十分納得いただける説明ができたか心もとなく、ここで改めて考えてみたいと思います。

『実践倫理講座・天の巻』には、「倫理力」は大自然の摂理によって、人間の心の内に生まれながらにセットされている「より善く生きようとする力」であり、誰かに教えられるようなものではないとあります。これが「倫理力」の本質です。

では、なぜ倫理力が、生まれながら人間に備わるようになったのでしょうか。かつて名誉会長が、それについて触れられた講演（平成二十六年・春季大会）があります。それを復習しておきましょう。

講演では、遙か昔、人間の祖先はヒトとして生きのびるために倫理力を身に付けなければならなかったとして、NHKスペシャル「ヒューマン なぜヒトは人間になれたのか」という番組を紹介してくださいました。次のような内容でした。

ヒトの祖先はかつて、ゴリラやオランウータンと同じように、食べ物が豊富で、木々が生い茂って外敵の攻撃を受けにくいアフリカの森で暮らしていました。ところが、やがて森を出て、草原で暮らし始めるようになります。草原は森と違って食べ物が少なく、身を隠す場所がありません。飢えの恐怖にお

びえ、外敵を警戒しながら、狩猟と採集の生活を送っていました。このような厳しい環境で生き続けるためには、集団をつくって互いに助け合わなければ生き残ることができないのです。

今も狩猟と採集の生活をアフリカ南部の砂漠周辺で続けている（ブッシュマンと呼ばれていた）サン人の人びとは、徹底した平等主義を守り、食料も皆で助け合って手に入れ、分け合って食べるのだそうです。天候不順で飢餓に見舞われたときも、ほかの部族が助けを求めてきたときも、彼らは自分たちの食料を分け与えます。人間には、他人の痛みや苦しみを我がこととして感じる「共感力」があります。空腹に苦しんでいる人を見れば、それを自分の苦しみと感じて、助けずにはいられないのです。この共感する心が引き金になって助け合うという行為が生まれるのです。

そして、この助け合う行為こそ、集団が生きのびるための知恵だったのです。もし集団の中の一人が、食料を独り占めして群れを去ったらどうなるでしょう。じきに食料は尽き、ほどなく餓死してしまいます。その部族も、また人類それ自体も滅亡していったに違いありません。

逆に、乏しい食料を皆で分け合ったらどうでしょう。一人ひとりには空腹を満たせないかもしれませんが、皆で力を合わせて食料を探しだすことができるので食料を得る確率は高まり、生きのびる可能性は増すはず。つまり、食料を独り占めするより、みんなで分け合ったほうが、過酷な自然環境のもとでは生き残る確率が高かったのです。

ヒトが生きのびるためには、集団をつくり、食料を等しく分け合い、互いに助け合う精神が必要だったのです。生きのびるためには、「我も人もの仕合わせ」を求めて実践していくしかなかったのです。こうして見てくると、「倫理力」はヒトという種が生きのびるために身につけた、助け合い「より善く

生きようとする力」だということがよくわかります。言い方を換えれば、「倫理力」のおかげで、ヒトは過酷な自然環境の中で生きのびて、現在の人間に進化することができたのです。

ところが時代が下り、集団が大きくなって社会を形成するようになると、人を責める心や自分さえよければよいとする心、金銭への飽くなき欲望などが膨らんで、本来人間に備わった倫理力を曇らせ、衰弱させてしまいました。こうして、今日のような、利己主義がぶつかり合った格差社会に至ったのです。しかし、どんな社会になっても、人間から倫理力がなくなるはずがありません。倫理力は人の本性であり、人間の根底に備わった力だからです。

では、最初の質問、「倫理力」を強化するには、どうしたらいいのかを考えてみましょう。

先に、助け合う力の引き金になるのは、「共感する力」であると申しました。つまり、人の苦しみを我がこととして感じる共感する力を高めることが、「倫理力」を強化することにつながるのです。

人の苦しみが理解できるのは、その人が人生において同じような苦しみを体験したからです。「あの青年は、今、進路に悩み苦しんでいる。かつての自分もそうだった」と、彼の悩みを共有します。自分も進路にはさんざん悩んできた、だから彼には、早く苦境から脱してほしい。そのために自分は、何か手助けできることはないだろうか、と考えるのです。

しかし、進路に悩んだ経験のない人は、青年がどうして悩んでいるのかがさっぱりわかりません。「なぜ、あんなつまらないことで悩むのだろう。時間の無駄だな」などと思うかもしれません。

つまり、人生においてさまざまな経験を積み、悩み苦しんだというストックがたくさんある人は、人におかれた困難な状況を正しく理解し、その苦しみを感ずる力が豊かであるということです。この高

い共感力が、「倫理力」を強化させていくのです。もうおわかりですね。「倫理力」を強化させるためには、さまざまな人生経験を積むことが大切だということなのです。

しかし、ただ経験を積みばいいというわけではありません。経験の質が問題です。困難な場面に突き当たったとき、その現実と真正面から向き合い、現実があるがままに受け容れて、それを上機嫌で乗り越えようと努力した、という経験でなければなりません。乗り越えようとする努力、これが人生の経験値であり、本当の力となるものなのです。

しかし、一人では乗り越えられない困難もあります。そのようなときに、共に努力をする、同じ目的に向かって努力する仲間がいれば、それが励みになり、乗り越える力ともなります。苦しいときは、苦しみを分かち合うことで辛さが半減し、喜ぶときは、共に喜び合うことで歓喜を増すことができます。そのような素晴らしい仲間がいる「場」がわが会にはあるのです。そうです、「朝起会場」です。

社会は生産性や効率を優先するために、人間の価値を能力や実績などで評価します。そのために行くことができない人も現れます。それに比して朝起会は、家族がそうであるように、その人が、ただその人であるだけで、無条件で受け容れてくれる場なのです。寒風吹きすさぶ冷やかな社会に対して、太陽の温かい光の降り注ぐ日向ひなたのような場が朝起会場であるともいえるでしょう。

「倫理力」は、人間が人間らしく生きるための力です。人に倫理の実践を促す力でもありません。「朝起会場で倫理力を磨く」。今一度この原点に立ち返り、会場の活性化へとつなげていただきたいと思えます。やや気が早いのですが、これを来るべき新しい年の実践テーマとしていただきたいと思います。この高